

次のスライドから試行3が始まります。「試行3の終了です」というスライドまで音読を続けてください.

結婚式は、真昼に行われた。

新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となった。

祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持ちを引きたて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも忝え、陽気に歌をうたい、手を拍った。

メロスも、満面に喜色を湛え、しばらくは、王とのあの約束をさえ忘れていた。

祝宴は、夜に入っていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなった。

メロスは、一生このままここにいたい、と思った。

この佳い人たちと生涯暮して行きたいと願ったが、いまは、自分のからだで、自分のものでは無い。

ままならぬ事である。

メロスは、わが身に鞭打ち、ついに出発を決意した。

あすの日没までには、まだ十分の時が在る。

ちょっと一眠りして、それからすぐに出発しよう、と考えた。

その頃には、雨も小降りになっていたよう。

少しでも永くこの家に愚図愚図とどまっていたかった。

メロスほどの男にも、やはり未練の情というものは在る。

今宵呆然、歡喜に酔っているらしい花嫁に近寄り、「おめでとう。私は疲れてしまったから、ちょっとご免こうむって眠りたい。眼が覚めたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。私がいなくても、もうおまえには優しい亭主があるのだから、決して寂しい事は無い。おまえの兄の、一ばんきらいなものは、人を疑う事と、それから、嘘をつく事だ。おまえも、それは、知っているね。亭主との間に、どんな秘密でも作ってはならぬ。おまえに言いたいのは、それだけだ。おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りを持っている。」

花嫁は、夢見心地で首肯いた。

メロスは、それから花婿の肩をたたいて、「仕度の無いのはお互さまさ。私の家にも、宝  
といっでは、妹と羊だけだ。他には、何も無い。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟に  
なったことを誇ってくれ。」

花婿は揉み手して、てれていた。

メロス は笑って村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った。

眼が覚めたのは翌る日の薄明の頃である。

メロス は跳ね起き、南無三、寝過したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。

きょうは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。

そうして笑って磔の台に上ってやる。

メロスは、悠々と身仕度をはじめた。

雨も、いくぶん小降りになっている様子である。

身仕度は出来た。

さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出た。



私は、今宵、殺される。

殺される為に走るのだ。

身代りの友を救う為に走るのだ。

王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。

走らなければならぬ。

そうして、私は殺される。

若い時から名誉を守れ。

さらば、ふるさと。

若いメロスは、つらかった。

幾度か、立ちどまりそうになった。

えい、えいと大声挙げて自身を叱りながら走った。

村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、日は高く昇って、そろそろ暑くなって来た。

メロスは額の汗をこぶしで払い、ここまで来れば大丈夫、もはや故郷への未練は無い。

妹たちは、きっと佳い夫婦になるだろう。

私には、いま、なんの気がかりも無い筈だ。

まっすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。

そんなに急ぐ必要も無い。

ゆっくり歩こう、と持ちまへの呑気さを取り返し、好きな小歌をいい声で歌い出した。

ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達した頃、降って湧いた  
災難、メロスの足は、はたと、とまった。

見よ、前方の川を。

きのうの豪雨で山の水源地は氾濫し、濁流 | 滔々と下流に集り、猛勢一拳に橋を破壊  
し、どうどうと響きをあげる激流が、木葉微塵に橋桁を跳ね飛ばしていた。

彼は茫然と、立ちすくんだ。

あちこちと眺めまわし、また、声を限りに呼びたててみたが、繫舟は残らず浪に浚われて影なく、渡守りの姿も見えない。

流れはいよいよ、ふくれ上り、海のようにになっている。

メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手を挙げて哀願した。

試行3の終了です.